学生スポーツが目指す道

ボクシング部 宮脇 貢(昭和62年卒)

1. 私とスポーツの繋がり

私とスポーツの「繋がり」は3つの時期に分かれます。それは「①競技者、②指導者、③支援者」としてスポーツと繋がったからです。このそれぞれの時期での経験をもとに「学生スポーツ」が目指すべき目的について、みなさんと共に考えたいと思います。

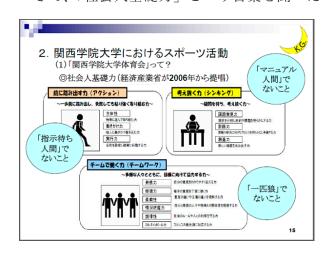
なお、スポーツ団体に所属していない学生のみなさんも、まず「学生スポーツ」について考えた後、身近な現在取り組んでいる活動に置き換え考えてみてください。きっと、関西学院大学での学生生活を有意義なものとする一助になると思います。

2. 私が「競技者」としてスポーツと繋がり、気がついた目的

私がスポーツに真剣に取り組んだのは、関西学院大学に入学してからです。「真剣に取り組む」とは、本気で日本一を目指し真摯に練習していたという意味です。

取り組んだ競技はボクシングです。関西学院大学体育会ボクシング部に未経験者として入部、卒業後も2年間社会人として競技に出場しました。入学は1983年(昭和58年)4月、卒業は1987年(昭和62年)3月なので、1983年から1990年が「競技者として繋がっていた時期」になります。

さて、「社会人基礎力」という言葉を聞いたことはありますか。これは経済産業省が



2006年から提唱している「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事する上で必要な基礎的な能力」と定義されているものです。具体的には「前に踏み出す力(アクション)」、「考え抜く力(シンキング)」、「チームで働く力(チームワーク)」の3つの能力から構成されています。この社会人基礎力は、社会に出てからも養い続けなければなりません。しかし、学生時代の様々な経験がこの力を身に着ける絶好の機会であることを、

入学以来、既に多くの場面で耳にしませんでしたか。

この時期に私が体感した学生スポーツに求められている目標は、勝利を目指し日々研鑽すること、そしてその過程で、まさしくこの3つの能力を身に付けることです。

3. 私が「指導者」としてスポーツと繋り、気がついた目的

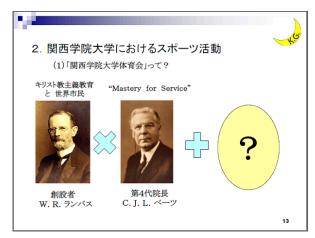
現役引退後、1990年(平成2年)から2001年(平成13年)の間、関西学院大学体育会ボクシング部の監督を拝命しました。この期間が「指導者として繋がっていた時期」で

す。その時、まず始めに感じたことは、スポーツの現場において指導者は必ず「結果」を 求められるということです。学生スポーツにおいても同じです。

私は指導者として始めは「競技力向上による、より良い成績獲得」を目指していました。 しかし、経験を重ね、学生と接する中で「競技力向上の過程で陶冶されていく、より良い 人間形成」という結果を目的とすべきことを学びました。

一言でいうと「文武両道」、同時に「学業成績」と「競技成績」の2つの成果達成を目指すことを求めなければならないことを。とりわけ、関西学院大学体育会の指導者には、「競技実績の向上」に加え、日々の活動の中で「関西学院大学の建学の精神を具現化する人間教育」を行うことが求められます。

みなさんは関西学院のスクールモットー「マスタリー・フォア・サービス」はご存知のことと思います。関西学院大学体育会にもモットー「ノーブル・スタボネス」があります。この2つのモットーの意味を考え、生涯を通してその具現化に精進し続ける気骨を在学中に身に着けることが、関西学院大学の学生スポーツに求められている目標と受け止めなければなりません。



4. 私が「支援者」としてスポーツと繋がり、気がついた目的

私は支援者に幅広い意味を含ませています。競技者と指導者以外の繋がりを支援者としての繋がりだと考えました。それは、学生スポーツが、まず「大学」、そして「各団体を物心両面で支える OBOG 会組織」、「競技会運営を行う競技団体」等、数多くの立場から惜しみない支援を受けることで絶えることなく活動を継続していることを知ったからです。

私は指導者を引退した 2001 年から「兵庫県ボクシング連盟」の事務局として競技団体 運営に加わりました。お陰様で 2006 年(平成 18 年)に兵庫県で開催された「国民体育大会」 のボクシング競技運営の中核を担う貴重な経験の機会を得ました。さらにスポーツを通じ た地域貢献にも参加しています。それは兵庫県加古郡播磨町教育委員会が事務局の「播磨 町スポーツ推進委員会」の一員に 2008 年(平成 20 年)加えていただけたからです。こ れらの経験は学生スポーツとは異なる環境でスポーツに繋がり考える機会となりました。 この指導者を引退した 2001 年から今日に至る期間が「支援者として繋がっていた時期」 です。

さて、「国民体育大会」は我が国最大の国民スポーツの祭典として 1946 年(昭和 21 年)に京阪神地域を会場に第1回大会が開催されました。現在は都道府県対抗、各都道府県持回方式で毎年開催しています。当初は第2次世界大戦で疲弊した国民の気力や体力の増進のため、日常的にスポーツに取り組める環境整備を推進することが目的だったようです。



しかし、私自身、2006年「のじぎく 兵庫国体」の運営に係わり、都道府県単 位での優勝争いだけが目的ではないこと を痛感させられます。その結果、今も「す る、みる、ささえる のじぎく・ひょう ご国体」のフレーズが心に残っています。 その意図するところは、Q「国体に参加 しないか?」に対する3つのA「する!(選 手として出場しよう)」「みる!(会場に 行って観戦しよう)」「ささえる!(ボラ

ンティア等として参加しよう) になります。

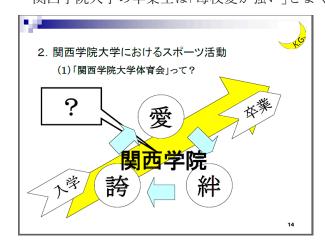
また文部科学省は1995年より「生涯スポーツ社会」の実現を掲げ、全国に地域密着型のスポーツクラブとして「総合型地域スポーツクラブ」を置くスポーツ振興施策を開始しました。今、わが国は、まさしく「生涯スポーツ社会」を実現するため、スポーツを安全に、楽しく「する、みる、ささえる」環境を整備していくことを目的とする諸施策に国、地方が一丸となり取り組んでいます。

2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催を目前にし、わが国の学生スポーツに求められるのは、この「する、みる、ささえる」を牽引することではないでしょうか。

5. 私が「関西学院大学 体育会」に繋がり、気がついた目的

2003年(平成15年)からは、「関西学院大学体育会」の「幹事」として体育会学生本部の活動に、また同年から「関西学院大学体育会同窓倶楽部(略称 K.G.A.A.)」の「事務局」として体育会各部の OBOG 会と共に体育会学生の活動に「競技者・指導者」とは異なる立場から繋がることができました。

関西学院大学の卒業生は「母校愛が強い」とよく言われます。そして、「卒業生の絆が強い」



とも。何故でしょうか?「母校愛」「絆」 は卒業してから生まれるものではありま せん。私は、母校で入学から卒業するま での期間に芽生え醸成された「誇り」が あって、初めて生まれてくる特性だと考 えています。

では、何がこの「誇り」を芽生え醸成 させるのでしょうか?まず、学生個人の 努力とキャンパスライフの充実が不可欠 でしょう。そのために大学が整えねばな

らない要件が多くあります。その重要な要件の1つとして「学生スポーツ」が果たす役割 もあるに違いありません。

スポーツには不思議な力が内在されています。このパワーが在学する学生に「誇り」を

芽生え醸成させるだけでなく、卒業生の「母校愛」と「絆」を強め、深めています。この「母校愛」「絆」「誇り」の3要素は相乗効果で更なるエネルギーを生み出してくれます。

関西学院に繋がっている学生、卒業生にこのエネルギーは元気な時には気力を増進させてくれます。そして「挫けそうな心」に押しつぶされそうな時には力強い支えとなってくれます。在学中に、そして卒業してから「母校から吹いてきた学生スポーツの風」に助けられ勇気づけられたという先輩の声を聞いたことがあります。

「関西学院大学のスポーツ」に求められているのは、この素晴らしい風を学内外へ吹き 続けさせることです。

6. 学生スポーツが目指す道

「勝利」を目指し日々研鑽し、その過程で「社会人基礎力」を身に着ける。 「建学の精神」の意味を考え、生涯を通じその具現化に精進し続ける。 「生涯スポーツ社会」実現のため、「する、みる、ささえる」を牽引する。 「母校愛・絆・誇り」を醸成する素晴らしい風を学内外へ吹き続けさせる。

これらは私がスポーツとの繋がりで得た、「学生スポーツが目指す道」のほんの一握りの道筋です。十人十色、学生スポーツが目指す道は一人ひとり異なっているかもしれません。しかし、聖書の言葉「狭き門から入りなさい」から生まれたことわざ(事をなすときに、簡単な方法を選ぶより困難な道を選ぶほうが、自分を鍛えるために役立つ)の通り、自分自身で決め歩む道が、必ずあなたを導いてくれます。これは学生スポーツに限ったことではありません。そしてあなた方の行動は、良きにつけ悪しきにつけ、必ず誰かに影響を与えていることも忘れないでください。

このような具体的な経験を多くの先輩は持っています。その経験を一つでも多く共有することがあなた方の生涯を支える財産になります。KGAA 寄附講座は先輩の経験を共有できる絶好の機会です。この機会を生かし有意義なものにしてください。

以上